

序論:この箇所の難しさと背景

現代人にとって受け入れがたい箇所だが、当時のコリント教会の状況を理解する必要がある。

コリント教会の状況

- 栄えている街、偶像の多い街、性的に乱れた街
- フェミニズムの原型のような思想が流行
- かぶり物をしない女性が増加
- 当時、かぶり物は婚姻関係の尊重、夫の保護下の象徴、社会的品位を示すもの
- かぶり物をしない=結婚の秩序への反抗、性的に自由な生き方のイメージ

1. かしら(根源、導き手、責任者)の原則 (2-3 節)

三つの原則

- 男のかしらはキリスト
- 女のかしらは男
- キリストのかしらは神

「かしら」の意味:

- 上下関係ではなく、導き手・責任者・保護者
- 起源・源という意味

キリストと神の関係:

- 三位一体で同格だが、地上では神のしもべとして歩まれた
- キリストと男、男と女の関係も同様の関係性・役割

2. かしらを辱めてはいけない (4-6 節)

礼拝(祈りや預言)の場において

男性の場合 (4 節):

- 頭をおおっていたら、自分の頭(=キリスト)を辱める
- 当時、男性のかぶり物は女性であることの意味表示
- 神が男として創造したのに、それを否定することになる

女性の場合 (5-6 節):

- かぶり物を着けていなかったら、自分の頭(=男)を辱める
- 頭を剃っているのと全く同じ
- 髪を剃る/切る=奴隷、不倫の罰を受けた女性、神殿娼婦のイメージ
- 非常に恥ずかしい行為

3. 自分は何の栄光を現す者として造られたのか (7-10 節)

創造の秩序 (7-9 節)

コリント人への手紙第一 11 章 7 節

「男は神のかたちであり、神の栄光の現れ…女は男の栄光の現れです。」

- 男:神の栄光を表す
- 女:男の栄光を表す(女性も神の栄光を表すが、特別な役割として)
- 創造の順番:男→女(男のあばら骨から)

女性の「助け手」としての役割:

- 決して劣るものではない
- ヘブル語では神がイスラエルを助ける時の「助け手」と同じ言葉
- 「神の手」の役割として、とても大切な役割

礼拝における振る舞い (10 節)

「女は御使いたちのため、頭に権威のしるしをかぶるべきです。」

- 御使い=礼拝の秩序を見守る者
- 自分に与えられた役割を重んじ、男の導きの下にいることを示す

4. 男女は共に神様から出た大切な存在 (11-12 節)

コリント人への手紙第一 11 章 11-12 節

「主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。」

- 女は男から造られた
- しかし男も女によって生まれる
- すべては神から出ている
- 男女に優劣はなく、どちらも大切な存在

5. 判断しなさい (13-16 節)

コリント人への手紙第一 11 章 13 節

「あなたがたは自分自身で判断しなさい。」

パウロの教え

- 絶対的な命令ではなく、判断を求めている
- 創造の秩序と役割は真理
- しかし時代によって「何が恥ずべき行為か」の常識は変わる

当時の自然な価値観 (14-15 節)

- 男性が長い髪=恥ずかしい
- 女性が長い髪=栄誉、神様からの恵みのかぶり物

16 節: そのような習慣(礼拝で神様ではなく女性の美点に栄光を当てること)は教会にはない

結論：現代への適用

パウロが語っていること

- 男性と女性の上下関係ではない
- 神様が与えた創造の秩序・役割を正しく理解し、礼拝の場で尊重すること

大切なのは

- 「かぶり物」そのものではない
- 何が神様の栄光を表し、何が創造の秩序を損なうのかを正しく判断すること

現代の礼拝者への問いかけ

男性として：

- 神様の栄光を表す者として、キリストをかしらとし、その導きに従う姿を現しているか

女性として：

- 神様が与えた助け手としての尊い役割を覚え、ふさわしい態度で歩んでいるか

すべての礼拝者として：

- 服装、ことば、礼拝前の時間の過ごし方、賛美の仕方、みことばへの聞き方、応答の仕方
- それらは主が与えた役割を全うし、示すべき栄光を示しているか

具体例

- 誰かが祈っている時におしゃべりをしていないか
- 親として子供が正しく神様を礼拝できるよう導いているか
- 「父と母を敬え」という神の秩序の意味を考えているか

最後に覚えるべきこと

「自分自身で判断しなさい」

- 聖書の原理原則をよく理解する
- 時代の中で何が神様の栄光を妨げるのかを見分ける
- 礼拝者として正しく判断し、行動で示す

教会と礼拝は：

- 私たちの好みや文化の主張を表す場所ではない
- 神様の栄光を第一とする場所
- 男性も女性も互いに尊重し合いながら、主の前に整えられた心で歩む場所

応答：自分が教会や礼拝の場でどのように振る舞ってきたかを思い返し、御言葉に応えて、これからどのように歩むかを決心する